
おれの空

スピラ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

おれの空

【Nコード】

N9816P

【作者名】

スピラ

【あらすじ】

盲目の少年リュウ。彼は生まれつき視覚に障害を持っていた。障害があるとはいえ彼にはまだ光があった。だが、その光さえも彼の手から滑り落ちてゆくかのように時と共にだんだんと消えていった。この話は光を失った少年とその少年に光を与えられた人々との物語になる予定です。またこの話はフィクションです。

第1話「めざめ」

第1話「めざめ」

それは、青かった。

どこまでも透き通っていて吸い込まれそうな青。

なんだか。

なんだか懐かしいような気がした。

* * *

眠い。

そう思いながらおれは目を覚ました。

眠いのにも目が覚めるとは便利なものだ和我ながら思う。

しかしそれが便利かどうかはこれから決まる。

(もうちよつと寝ようかな)

(いや、だめだ。起きなきゃ)

この葛藤に勝つてこそおれの能力は発揮される。

(さあ、起きるんだ！)

(いや、だめだ！消耗しきったままではペントリンにさえも苦戦することになるぞ。つまりだ。もうちよつと休憩を)

(何が消耗しきっているだ。今日は軽く8時間以上寝てるじゃないか。回復は十分できているはずだ！)

(それは今日の話で昨日はぜんぜん寝てないじゃないか！)

戦いは終わった。

見事に黒いおれ、いやむしろおれの身を案じてくれるのだから白か？が勝った。

「もうちよつと寝ようつと」

そう呟いてからおれはまた眠りの世界へと…旅…立った？

ボタン。

そんな音がした。

なんだ？と思ったその瞬間

「マスター。起きてください。」

不意に耳元で声がした。

ドアが閉まる音がしてからすぐのことだったのでおれは

「うわぁー!!」

つと、年甲斐もなく大声を上げながら飛び起きてしまった。

「マスターは朝からも元氣なんですね。」

おれが大声を上げながらの目覚めを見てこいつは

「って何でおまえはいつもそう落着いていられるんだ?」

当然の疑問をやつにぶつける。

すると、

「マスターが落ち着きのないだけではないですか?」

た、確かに。よくみんなから言われるから言い返せない。

「そもそもあなたは私のマスターです。人の上に建つものとしてあなたには…。」

もう少し私のマスターとしての慈覚と言うものを持っていたかなければいけないですね。」

また説教だ。

見る見る間におれのテンションは下がっていく。それに、

それにおれは、自分の疑問が解決する前に一番聞きたくない言葉を聴いてしまった。

マスター…。

何がマスターだ。

他人を自分に服従させ、その人の人生まで奪い取る権利がどこにあると言うのだろうか。

「なあ、ノア。お前は何でおれのことをマスターって呼んでくれるんだ?」

「もちろん、あなたが私のマスターだからです。」

答えになつてない。

「いや、だから何でおれのことをマスターとして認めてくれているのかなあって思ったんだけど…。何で?」

急にノアの顔が悲しそうになる…気がした。

「マスターは私のことを従者として認めてくだらないのですか？」
どうしてそうなる？

「そ、そうじゃないけど。けどさ」

「では問題ないですね？」マスター。」

いやある。大有りだ！！

「いやその、ノアがおれの手助けをしてくれるのはうれしいんだけど主人と従者って言うのはいやかなって。そう思ったんだ。」

「私は、いやではないです。むしろあなたに独占されたいくらいです。」

ど、独占？

独占とはどういうことだろう。おれに独占されたい？何でだ？

「ノアがいやじゃなくてもおれがいやなんだ。なんか無理やり従わせてるみたいで差。」

ノアが息を呑む音がして

「マスター！！」

いきなり抱きついてきた。と言うか突っ込んできた？

（こ、これは。そこらへんのモンスターの体当たりよりも強烈だな。）

そんな暢気なことを考えているときにおれはあることに気づいた。

（ん？抱きつかれている？だれにだ？…ノア？！）

やっと状況の把握に成功したおれは急激に顔が厚くなっていくのを感じた。

「ノア……。」

そう、この少女はノアと言う。

訳有っておれの手助けをしてもらっている。

…がその出会いが特殊すぎた。

「マスター…。あなたはやはり優しいですね。」

「ノア……。」

今にも力いっぱい抱きしめてやりたいのを我慢しておれは言葉を紡

いだ。

「ノア。おれはお前をそう呼ぶ。それと同じでお前もおれのことを名前で呼ぶ。」

それはごくごく普通のことだと思うんだ。どう…かな？」

やっと言えた。

が、返事が返ってこない。何でだろう。

おれは何か彼女の傷つくことを言ってしまったんだろうか。何か彼女の気に障ることを言ってしまったんだろうか。

もう一度自分が言ったことを思い返して見る。

<<ノア。おれはお前をそう呼ぶ。それと同じでお前もおれのことを名前で呼ぶ。>>

いや違う。同じではない。悔しいがおれとこいつでは

「マスター。」

そのとき不意にノアが話し始めた。

「マスター。あなたのお気持ちはとてもうれしいのですがやはり。」

ノアの表情がどんどん暗くなっているかのように声がだんだんと力を失っていった。

「やはり私とあなたでは身分が違います。」

分かっていった。さっき自分の言ったことをもう一度考えて見てやっ
と気付いたのだ。

確かにノアとおれとは身分が違いすぎる。分かっていた。なのに。

「何故なら、私はもともと」

「言わなくていい。いや、言わないでくれ。」

そっぴいながらおれはノアを

「マスター…。」

力いっぱい

「ごめん。おれが馬鹿だからお前に苦しい思いをさせてしまって。」
抱きしめた。

「…マスター…。」

彼女もおれのことをぎゅっと抱き返してくれた。

うん。なんともいいムードではないか。

…ガチャリ。

そんな中、ドアノブがまわされる音と、

「おはようございます。リュウ様。」

なんともKYな声と

「……リ、リュウ様！それにノアさん！！ああああなたたちはなにをお！してえ！いるんですかああ！！」

つという怒鳴り声が聞こえてきた。

「おはよう。リオン。今日もいい朝だね。」

そうおれは彼女に話しかけた。我ながら何という落ち着きだろう。

やっぱりノアが近くにいと安心するなあと思っていると

「そうですね。なんでも今日は春らしい暖かな一日になるようですよ。」

なんだ、取り乱したのは最初だけか。とちょっとほっとしながらリオンを見ていると

「ん？……うん？……って違ああうつ！！」

ちつ。気付かれてしまっではしかたがない。

「ななな何でリュウ様とノアさんが抱き合いながらベットのにいるんですか？！いいなあ。」

最後の方はもごもごと言っていたのでよく聞き取れなかったが、おれとノアが抱き合っているのをみて衝撃を受けたらしい。

「その……リオン？何を勘違いしているのか知らないけど

おれとノアは何も怪しいことはしていないよん？」

ちよっとかわいく言ってみたのだが

「リュウ様！！」

だめでした。

つというか火に油を加えてしまったようで

「わわわわ私はあなた様をそそそそんなふしだらな子に育てた気はありませんよ！！」

育った気もありません。

それにお前はおれより年下じゃないか！

そうスパツと言えたらなあ、と思いながら何も言えないおれ。
なんとも情けない限りだ。

「捻じ曲がった精神は力づくでなおすのが一番です！」

今度は何と物騒なことを言っているんだ？こいつは「

「なあ待てってリオン。話せば分かる。あっそうだ！ノア！お前からも何か言ってくれよ。なっ！！」

と、最後の手段をとった俺は安心してノアを見つめたが。

「……くつつつ……、すつつつ……」

なんとこの騒がしい中おれの胸の中で寝ていた。

「……かわいいな。」

ぼそりと言ったその言葉に一番反応したのはリオンだった。

「リリリリ、リュウさまあああ！！」

その声と同時に大剣を抜く音がした。

（や、やばいな。ありや本気だ。）

そう思うなりおれは行動にでた。

まずノアをベットに残し立ち上がる。そして

リオンのほうを向き右手を自分の胸に当て

左手をリオンの法に突き出す。このとき手のひらと床が平行になるようにする。

リオンもリオンで何か技を出そうと集中しているようだ。

（今がチャンスだな）

そう感じ手早く呪文を心の中で唱える。

（時よ、我に刃を向けるもの無垢なる人々の平穏を脅かすものを時の鎖によりてこの時に縛りつけたまえ！！）

「いきますよ！ロック！ブレイク！！」

大剣を大きく振り上げその勢いのまま振り下ろしてくる。

「させるか！オルスティアス！！」

その瞬間。

「くっ……くっ。」

大剣を振り上げた姿勢でリオンは固まった。

いや、おれが固めた。ごめん。

「リ……リュウ様。魔術を……お使いになるなんて……。」

恨めしそうにこちらを見るリオン。ちよつとやりすぎたかなと反省するおれ。

「……ごめん。でも元はと言えばリオンがおれの話を書いてくれないから。っていうかりオンのほうだよね先に戦闘態勢に入ったの?」

「そうですね。いつも言ってるでしょう。もう少し冷静に物事を見るべきだと。」

うんうん。そのとおりだ。う?

「そうですね……。つかつとなっちゃって……!ノアさん!」

普通に答えた跡にリオンの表情が驚きにそまっていくな。

だから遅いつて気付くの。

「ノア。お前いつから起きてた?まさか寝てなかったとか?」

「いえ、恥ずかしながら寝ていました。申し訳ありません。」

「いや……起こってるんじゃないかと……。」

何で助けられなかったのだろうとそう思っていた。

「私が何故マスターをお守りしなかったのかと想っていらつしやるのでしたら、

私は武器を持っていますので無力なのともうすでにマスターの魔術が成立していたためです。」

「お前はいつでもおれの考えはお見通しだな。」

「当然です。それにその他の人の考えも多少は分かります。」

少し誇らしげにそういった後

「マスター。そろそろリオンさんを開放してはどうでしょうか?なんだか辛そうですね。」

「あつ!忘れてた。」

「忘れないでください!!」

リオンの悲痛な叫びがおれを襲った。

「わ、分かったから静かにしてくれ。」

もう一度リオンのほうを向き右手は胸に左手はリオンのほうに突き出した。

（時よ、汝らが捉えしものを開放しそのものを刻みたまえ。）

「リムルティーム！」

バタリッ。

呪文が唱え終わるとリオンの戒めは解かれ彼女はその場にへたりこんだ。

「ふう。」

一息をつく。

「いやあ、今日もいろいろあつたな。」

そういいながらおれはベッドへ上がる。

「じゃあおれ寝るから。」

そう言つて布団にもぐろうとした瞬間。

ガバッ！！

両脇を二人の女の子につかまれた。

「どうした？…もしかして一緒に寝る？う、うわあ！」

思いつきり引つ張られベッドから引きずりおろされる。

「いたたた。何すんだよ。二人とも」

「マスター。まだ朝です。」

「そうですよりユウ様。今から朝食じゃないですかあ。」

「そりゃあそうだけど。」

疲れた。休ませてくれ！！

そんなこと言えるはずが……ない。

「さあ、マスター。急ぎましょう。」

「もうおなかペコペコですしねえ。」

そ、それはお前だけだろう。リオン。

「わ、分かったから！一人で歩けるから！！」

その言葉もむなしく。

「さあ、行きましょう。」

と、息のそろった二人の声と共に

「わ、わわわわ」

おれは寢室をあとにした。

「作者からの挨拶」

皆様始めまして。スピラと申します。

今回は私の書いた文章を読んでいただき本当にありがとうございます。

私は今回始めて小説を書くので文章力もなく突っ込みどころも満載のものとなってしまいかと思います。

是非アドバイス等をいただけたらなと思います。

また、この作品では戦闘シーンを書くため技名や魔法名で「ん？」と思われるものがありましたら教えていただけるとうれしいです。特に著作権に触れるものなどは早急に対処いたしますのでご協力をよろしくお願いいたします。

それではいつになるかは分かりませんがまた更新の時に会いいたしましょう。

失礼いたします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9816p/>

おれの空

2011年1月13日08時20分発行